



伊良部島「渡口の浜」で伝統の宮古上布を着て古謡を歌う與那城美和さん。宮古島から小舟に乗ったネフスキーは、右手に続く入り江を進んで島に入った

## 古謡探究 古い日本文化に光

白砂の浜辺に波が寄せる。沖縄・伊良部島「渡口の浜」。1929年（大正11年）8月、ロシア人がこの沖から入り江に入り、伊良部村（当時）に渡った。言語・民俗学者、ニコライ・ネフスキー（1866～1937年）。馬が仕立てられ、国仲寛徳村長宅へ。「この島には古謡がたくさん残っているそうですね」と達者な日本語で切り出した。

国仲の日記を基に、孫が記したやりとりが今に伝わる。「新築や出産の祝い歌は、ここごとく古謡そのままです」と答えた国仲に、ネフスキーは迫った。「その古謡を聴きたい。ぜひ今夜にお願いしたい。ぜひとも」。外出していた妻が呼ばれ、歌った。歌詞を速記し、その場で復唱する。一言一句正確なことで、居合わせた人たちは驚嘆したという。

サンクトペテルブルクから国費留学したネフスキーは、母国の社会主義革命の混乱を嫌い、日本に残ってアイヌ語や岩手の民間信仰の研究を続けた。小樽高商（現・小樽商科大）でロシア語教師を務めていた時、宮古諸島に日本語の古謡や文化の古層が残っているとみて研究を構想。転出先の大阪から26年、28年と合わせ計3回、約3カ月にわたる現地調査を行った。5千語を収める言葉と伝承の記録は、「宮古方言ノート」として平良市（現・宮古島市）教育委員会が出版している。

「古謡には今では意味の分からない言葉がある。そんな時『方言ノート』を手に取ります」と話すのは、宮古島の唄者、與那城美和さん。「ネフスキーは、離島中の離島の宮古に息づく豊かな文化を今に伝えてくれた」

ネフスキーは小樽時代から積丹半島の入舸村（現・後志管内積丹町入舸町）出身の萬谷イソさんと愛し合い、28年には大阪で長女エレーナさんが生まれた。29年に神戸のソ連総領事館で結婚登録し、帰国。母校のレニングラード大（現・サンクトペテルブルク大）で膨大な宮古研究の成果をまとめようとしていた矢先の37年10月、一家の生活は暗転する。

文・藤盛 一朗

写真・植村 佳弘

2面に続く



# 時を訪ねて ネフスキーの言語調査

## 非業の死悼み顕彰碑建立



ネフスキーが最初に足跡をのこした宮古島、平良港近くに建つ顕彰碑。宮古研究（之）の先駆者と碑文が刻まれている



ネフスキーの直筆ノートを複写し、5千語の宮古の言葉が収録されている「宮古方言ノート」

ネフスキーは言葉の天才だった。「入舸のどこの人かと思っただら、ネフスキーさんだった」。後志管内積丹町入舸町出身の妻、イソさんの親族にはこんな話が伝わる。積丹半島の中でも難解といわれる入舸方言を自在に話した。

宮古島や伊良部島、多良間島、来間島の調査旅行の準備では東京、大阪で宮古島出身者に方言を習った。現地では島の言葉であいさつし、島や集落で微妙に変わる発音も聞き分けた。宮古諸島の学術調査の先駆けとなった旅は、いずれもロシア語を教えた大阪外国語学校（現・大阪大外国語学部）の夏休みに行った。亜熱帯の暑さの中、国際音声表記やロシア語、日本語、英語で端正に言語を採録。直筆ノートを複写したB5判の「宮古方言ノート」は、上下で計1177ページにのぼる。宮古島市総合博物館の久貝かおり学芸

員は「人に会ったのは暑さが和らぐ夕方や夜だった」と想像する。サツマイモ中心の当時の食事を苦にした様子はない。最後の宮古訪問の翌1929年（昭和4年）、ネフスキーはソ連に帰国。レニングラード大などを拠点に学術生活を送り、33年にイソさんと娘のエレーナさん（28〜2017年）を日本から呼んだ。だが夫妻は37年10月「日本のスパイ」のぬれぎぬで相次ぎ逮捕され、11月24日に2人とも銃殺されてしまう。無辜の市民をも標的にしたスターリン政権の大テロだった。ネフスキーが拷問を受け、イソさんはつちあげ調書への署名を拒否し通したことが分かっている。ネフスキーはスターリン批判後の57年に名誉回復（イソさんは58年）され、ソ連最高のレーニン賞に輝いたが、死の真相は、ソ連崩壊直前の91年、小児科医となったエレーナさんが公文書で突き止めるまで闇の中だった。

平良市の市長だった伊志緒亮さん（87）は、宮古とロシアに「虹の橋」を懸けた人物の非業の死に心を揺さぶられた。2001年に市民を率いてサンクトペテルブルクを訪ね、夫妻の遺体が埋められた集団埋葬地で



1989年7月に母イソさんの故郷、積丹町入舸町を訪れたエレーナさん。「札幌で親族らが47人、積丹ではさらに10人が迎えてくれた」と、ロシア語手記に感激をつづっている  
（三上勇雄、二子夫妻提供）

與那城美和さんは伊良部島の渡口の浜にたたずみ、古謡「白鳥の歌」を歌った。白鳥が枝に産んだ卵から生まれたのは赤いひなで、困難に負けないでと母鳥が励ます。與那城さんは、大樹が枝を広げるように宮古の古謡の世界を島外に伝えたいと願ってきた。今年の「日ロ地域交流年」を記念して3月にはロシア・ウラジオストクに招かれ、ネフスキーの生涯を描いた音楽朗読劇「島へ」公演（在ウラジオストク日本総領事館主催）に両国の音楽家、俳優と出演。終幕でこの曲を歌った。

冥福を祈った。「琉球舞踊を踊った。たくさん生きたら、さらにどんなに素晴らしい仕事をしただろう」と惜しむ。市は翌02年、平良港に近い一角にネフスキーの顕彰碑を建立。宮古島の聖地、漲水御嶽から碑に至る石畳の坂道を「ネフスキ通り」と命名し、記念行事にエレーナさんを招いた。「ていだにヨイさす（太陽を突き刺す） まゆだむニョー（大樹の真枝に）」。唄者、



④ネフスキーの撮影した宮古島平良（漲水）港と伊良部島の風景（天理大付属天理図書館所蔵）  
⑤岡・来間島の人々（同）

1920年代の出来事  
 ■ソビエト連邦が成立（1922年）  
 ■十勝岳が大噴火（26年）  
 ■昭和に改元（26年）  
 ■昭和天皇の即位の礼（28年）